（5）注（1）拙論文。
（6）注（4）史料。
（7）奈倉哲三『真宗信仰の思想史的研究――越後蒲原門徒の行動と足跡』（校倉書房、一九九〇年）一三五頁。

（岐阜大学助教）

岡安儀之著
『「公論」の創生「国民」の誕生――福地源一郎と明治ジャーナリズム』
（東北大学出版会・二〇二〇年）

小川原　正道

福地源一郎が『東京日日新聞』に入社した一八七四年から約十年間を対象に、同紙上で開陳された福地の言説と思想を読み解き、福地の再評価を試みたのが、本書である。

著者は、福地の死に対する夏目漱石の辛辣な評価から筆を起こし、福地に対する「御用記者」「官権派」「漸進主義者」「保守主義者」「変節漢」といったネガティブなイメージは当時から存在しており、それが今日の福地研究の低調さにつながっているとする。しかし、明治期において福地は、福沢諭吉と二分するまでの影響力を誇っていたとして、著者は新聞記者としての福地について、近代日本のメディアの発達と民主化を考える上で欠かせない人物であるとし、漱石のような評価が生まれ、福地が地に埋もれた存在になった経緯、明治期に社会を動かしていた福地の新聞論説とはいかなるものだったのか、を問う。本書の射程は、福地が『東京日日新聞』の記者となった一八七四年からおよそ十年間にあてられ、従来のネガティブなイメージを解体し、福地を無視する原因となった戦後歴史学の進歩史

観に対し問題提起をすることに、執筆目的が置かれている。

第一章では、「新聞記者」としての福地の自己認識について焦点があてられる。安政年間に、オランダ人が出島で「風説書」を作成することに疑問を持った福地は、その情報源である「新聞紙」の存在を知る。その後、洋行体験のなかで、情報や新聞の重要性や役割に開眼し、新聞社や新聞記者のもとを精力的に訪問した。こうした体験を通して、福地は、「科学技術を母体とした西洋新聞のメディアとしての社会的な役割、さらに「輿論」に対する政治的影響力を学び、それの持つ可能性・有用性を理解した」と著者は指摘する。かくして福地は、一八六八年に、『江湖新聞』の発刊によって新聞記者としてのスタートを切った。

『江湖新聞』で福地は、その情報伝達機能を重視し、平易な新聞作りを心掛けた。わずか二ヶ月で廃刊となった同紙を去った福地は官途に就くが、一八七四年に大蔵省を辞して再び新聞記者の道を選んだ。福地は新聞の拡大と記者の地位向上が、文明開化において優先される事項と考えていた。同年は、民選議院設立論争、学者職分論争が交わされた年である。福地は、明六社の社員が『明六雑誌』を通じて学識や徳行を流布させたこと高く評価し、その廃刊を惜しんだ。福地は、明六社員と新聞記者を「学者」として同列に置き、「劇作者」と同視・卑下されていた新聞記者が、社会の発展に寄与するという自己認識を示した。

福地は、「先覚者」が社会の発展を担い、「政事家」がこれに従って秩序を維持する、と考え、政府に対して限定的な役割のみを認めていた。そのモデルは、自治を基盤とする英米の政治的不干渉であり、社会契約説を否定する福地は、人間は政府による干渉がなくとも、社会を自然に発展させられると考えていた。その発展を支える人間の「交際」が拡大すると、自他の自由を守る法律が必要となってくる。福地が求めたのは、「善良の法律」と「秩序の自由」を基盤とした「文明」的社会であった。新聞記者は、「先覚者」として、人心や輿論を牽引していく存在であり、福地自身、「平民」をもって自認しており、その点で「貴族的」であった明六社知識人とは一線を画する、と著者は指摘する。

第二章では、『東京日日新聞』の政論新聞化の過程と、新聞の「啓蒙的役割」についての福地の見解が分析対象となる。一八七四年に福地が『東京日日新聞』に入社後、同紙は紙面改革に取り組み、政府の発する情報を詳細に伝え、紙面の情報量を倍増させたほか、社説欄を設けた。それまで消極的であった民選議院設立論争に対しても、加藤弘之の時期尚早論に理解を示しつつ、地方自治を優先する漸進主義を唱えていく。福地は、当時の政治的論争について、「功名の欲」を満たすための理念無き論争であると捉え、欧米にならって「一定の政治理念に基づく言論活動」を展開することで、「天下の輿論」を動かすことができると考えていた。こうした立場からの紙面改革は、

『郵便報知新聞』にも波及し、同紙の「論説」も常設化されていく。

一方で、当時の新聞は「無学の者」に無縁であり、その要因は、新聞に用いられる文体が難解であることにあった。福地はこの問題について、「高調の死文」を排して「活用の俗文」にすべきだと述べている。こうした「言文一途」は、まだ構想の段階にあったが、福地がすでに幅広い社会階層への視野を有していたことは注目される、と著者は強調する。福地は、近代国家の運営は、幅広い国民の意思、すなわち「輿論」に基づいてなされ、それが政治に反映されて、社会的秩序が安定していく、と考えていた。こうした福地の営みの結果、読者の意識も活性化し、新聞と読者との間で時事問題を論評して議論を戦わせる、「公論」空間が成立した、とされる。

第三章で著者は、従来、「官憲派」とみられてきた自由民権運動期の福地について、見直しを試みている。その際、注目するのは、「平民」に着目して「国民」形成論を唱えていたという、福地の姿勢である。著者はまず、福地と密接な関係にあった木戸孝允の「国民」像と福地のそれとを比較して、士族を評価して平民の政治的無気力さを指摘し、士族を中心とした「国民」形成を提唱した木戸に対して、福地は、一国の独立には国民の愛国心が必須であり、愛国心には「一身独立の生計を全うするの気象」が不可欠であるが、平民は独立の生計を立てているものの愛国心に乏しく、士族はその逆である、と論じたとする。その上で福地は、士族よりも平民に期待を寄せ、教育によって「国民」として育成できると考えた。

『東京日日新聞』と『郵便報知新聞』の間で交わされた士族平民民権論争においても、福地は士族中心の民権論の脆弱性を突き、学問によって平民を教育することの重要性を説き、士族に依頼するのであれば封建時代に復帰せよと述べている。そこには、平民が「沈実忠良なる気力」を有するという信念があり、士族は「封建の遺物」であるという認識があった。福地は、四民平等によって士族と平民が対等な立場で統合され、「国民」としての結束が生まれると期待していたのである。

第四章では、『東京日日新聞』誌上で展開された華士族論争に焦点があてられる。福地は、華族に家禄を永世下賜するとの公示を受けて、政府の禄制改革は家禄廃止を目指すものであり、これはその流れに逆行するものであると疑問を呈した。福地の主張に対し、華族の京極高典は、「君民立憲の政体」における、君民の間を取り持つパイプ役としての華族の役割を強調し、その階層的重要性を説く投書を寄せた。これに対し、華族が台湾出兵に際し何らの貢献もせず、家禄に執着していたといった平民からの批判が寄せられるなど、異論が噴出する。

士族をめぐっても、旧会津藩士の池上三郎が、武官としての職務を失った士族には、家禄を支給される理由がないとして、これを廃止するよう訴えた。これに対して、士族内から、家禄を廃止して士族が慣れない農業や商業に乗り出すと窮乏し、国

益にもならないといった反論が寄せられる。そこには、士族こそが、その公共的精神によって国家を支えてきたという自負があった。

こうした論争を喚起することで、福地は、家禄に安住する華士族の欺瞞性と、自活する平民の正当性を明白にしようとした、と著者は指摘する。福地の視線は、華士族といった階層を超えた先にある「輿論」「国民」に据えられていた。

第五章では、初代東京府会議長を務めた福地の地方自治論が検討される。福地は、民選議院設立建白書を受けた論説のなかで、市県レベルの「小議院」から国レベルの「大議院」へという漸進的国会開設論を展開した。福地は加藤と異なり、たとえ「愚民の集会」であっても、現実に議会を創設して人民に政治的実践を積ませることが重要であると考えていた。福地は、地方官会議の書記官を務め、「衆論」を把握するための装置として、民会の必要性を感じており、そのために官選ではなく公選民会が設立されるべきだと主張した。

これに対し、福沢の地方自治論が、比較対象として挙げられている。福沢は明六社において、加藤の時期尚早論に反駁し、民会即時開設論を主張した。福沢は、民会における政治的実践を通じて、「事を議するの習慣」を養成することを期待していた。また、福沢はこうした自治の担い手として士族に期待しており、農工商の平民についてはこれまで政治に関与してこなかったと否定的に捉えている。士族の有する国事に対する「心の元素」は、アメリカ人民の「報国の大義」と共通していると福沢は捉えた。

福地は、議会の「習慣」化に対して楽観的であった点において、福沢とは異なっていた。筆者はその要因について、「福地が江戸の町人や村落共同体の生活体験の中に自治の伝統を見出すという、福沢には見られない視点を持っていたからに他ならない」と指摘している。その上で著者は、「福地の思想は極めて進歩的な民権論で、福沢以上に民主的なものであったと言えよう」と評している。

以上、本書の内容を概観してきた。本書の学界に対する最大の貢献は、『東京日日新聞』の紙面をつぶさに分析することを通じて、福地が、士族よりも平民を重視し、四民平等によって「国民」を形成しようと構想していたことを、明らかにした点にあろう。新聞や新聞記者の重要性や、その社会的役割に対する福地の具体的構想を析出した点も、高く評価される。

一方で、本書のタイトルが『「公論」の創生「国民」の誕生』であることを顧みるとき、前者の側面、すなわち、福地がいかなる理由から「公論」を「創生」するに至ったのか、といった分析は、十分に行われているとは言いがたい。たしかに、新聞を舞台に展開された議論を通じて、「公論」空間が創出された、という「手段」や「結果」は示されている。では、福地はどのような意図や動機、背景から、「公論」を「創出」したのか。

その意味では、洋行体験に加えて、本書の最後で著者が「今

後の展望と課題」のひとつに挙げている、日報社の組織分析は、きわめて重要であろう。著者は、日報社に江戸の町民が参画していたことが、日本の「公論」形成の一起源となったという展望を描いている。この点を実証することは、福地自身の「公論」意識の芽生え、さらには平民への好意的言説の起源を考える上で、不可欠な作業となる。

また、「公論」空間の形成や広がりを検討することは、福地との親密さが強調されてきた木戸との関係についての、本書の指摘とも関連する。著者は、木戸と福地とが、士族と平民のいずれを重視するかについて、見解を異にしていた点を強調している。では、それでもなお、両者が親密であったのは、なぜか。それは、木戸自身が、五箇条の誓文の添削に携わり、「列侯会議を興し、万機公論に決すべし」との福岡孝弟案が、「広く会議を興し、万機公論に決すべし」に修正されたことに表れているように、「公論」を維新の精神として定着させた指導者の一人だったことと無縁ではあるまい。福地が幕臣として、洋行体験を重ねて新聞についての認識を深めている頃、日本では木戸らが、「公論」空間の創出を目指して尊王攘夷運動を試み、維新を成し遂げたのである。彼等がこの「公論」に基づく統治という国家目標を共有し、さらには、議会開設という具体的構想でも共鳴した結果、士族評価をめぐる見解の相違を超えて、両者は密接な関係を構築し得たのではないか。

また、評者は、筆者が福地の比較対象として挙げている福沢が、あくまで士族を重視し、士族の精神とアメリカ人民の「報国の大義」との共通点を強調し、また、日本史における士族の役割の重要性を強調した一因は、福沢自身が幕末維新期に身を置いていた環境が、中津藩、幕府、洋行使節団、そして慶應義塾と、きわめて政治意識の高い士族集団にあったことにあると考えている。福地が江戸の町民と交わる機会を通して、福沢とは異なる人的交流・交際を重ねていたとしたら、それは両者の相違をさらに際立たせることになろう。

福沢との対比、という面からさらに付言すると、評者は本書を通じて、福地と福沢との相違点よりも、むしろ共通点が多いことに気づかされた。地方民会優先論や政治的漸進主義、議会制度を定着させる上で政治的経験を重要する姿勢、世俗文でわかりやすく情報を伝えようとする著作執筆の指針、自由民権運動に「功名心」を読み取る点、さらには華族に対する批判、と両者には共通する点が数多く見られる。たしかに、福沢は士族優先論という意味では、『東京日日新聞』と対立した『郵便報知新聞』に近い立場をとってはいるが、「双福」には、相違点よりも共通点の方が多く見出せる。福沢が立憲帝政党に対する批判を展開した以外、福地を批判した形跡がほとんど見られないのは、著者の指摘する、福沢の新聞事業への評価や二人の親しい関係、学者像の一致などに加えて、こうした共通点があったためではないかと考えられる。

このほか、本書によって前進した福地研究に、残された課題

は少なくない。たしかに、筆者が指摘するように、福地は官よりも民を重視し、新聞記者の役割を重んじて、政府・政治の役割を限定しようと考えた。こうした福地が、のちには立憲帝政党を結党して、政府の主義をもってその綱領とするようになったのは、なぜか。本書の冒頭で示されているような、福地に対するネガティブなイメージを完全に覆すには、本書の分析対象としていないこうした事象をも、検討する必要があろう。また、福地がいかに平民を重視し、「言文一途」の重要性を説いたとしても、『東京日日新聞』の社説にはなかなか反映されず、口語体が全紙面において使用されるようになるのは、大正期を待たねばならず、福地は同紙を小新聞に改変することもなかった。福地の言説が、どこまで実地に移されたのかも、詳しく検証されなければなるまい。

福地は、きわめて政治意識の高い新聞記者であり、思想家であった。その意味で、木戸との関係に代表される政治史の文脈、そして、草創期から新聞事業に携わってきたジャーナリストとしての軌跡、さらには「輿論」や「国民」概念を論じた思想家としての業績など、多面的な評価が必要となる。今後、筆者の研究がさらに発展し、こうした学問領域を超えたダイナミックな福地像が描き出されることを期待したい。

（慶應義塾大学教授）

商兆琦著

『鉱毒問題と明治知識人』

（東京大学出版会・二〇二〇年）

神谷　昌史

一

私事からはじめて恐縮だが、以前ある人名事典に執筆したときのこと。事典が出版され、担当した項目を見て驚いたのは、書いた覚えのない一文が最後に付け足されていたからである。いわく、「平成に入ってエコロジーの視点から見直しが進められている」。事典項目の当該人物は、ユニークではあるが結局は秘教的セクト主義に閉塞したとしか思えず、「エコロジーの視点から」の再評価だの、その人物が残した得体のしれない曼陀羅だのは胡散臭いだけだというのが私の評価だったので、断りもなく正反対の文章が付け加えられていたことには不快感が拭えなかった。そんなこともあって、それ以前からあまり関心が持てなかった「エコロジーの先駆」や「近代文明を根源的に批判したいのちの思想家」などの評価がなされるタイプの思想家はますます敬して遠ざけるようになった。

本書が上梓されてしばらく手に取らなかったわけも、「鉱毒